

マルティン・ズーター

『知りすぎたガンザー (I)』

訳 岡本 奈葉

ガンザーがシャイヴィラーさんの家のベルを鳴らす時、彼の脈が上がる。彼は妻のウルジを横目にし、彼女の様子が自分の様子と似ていることに気がつく。口元が引きつって、そういう様子の時はいつも緊張している。

シャイヴィラーさんにプライベートで家に招待されたことは特権であって、その特権は多くの人に与えられるものではない。ガンザーはすでにいま約6年間その会社に勤めており、そのうちの2年間以上は取締役役に就いている。さらに彼は未だかつてシャイヴィラーさんと二言三言以上にプライベートな会話を交えたことがない。それは会話を避けることができないコーヒーマシン自販機のところ、エレベーターの中、あるいはトイレの中での偶然の出会いの際にもだ。

ガンザーはそのことでシャイヴィラーさんから嫌われているとは決して思っていない。というのも、シャイヴィラーさんは彼の私生活を世間からも会社の内部からも守る人として知られているからだ。だから手書きで正式な《小さな晩餐会》への招待状を社内メールで目の当たりにした時、ガンザーはそれだけいっそう感動した。

ウルジは特別に新しいワンピースを1着購入し、さらにガンザーはバルセロナ空港で3本のネクタイを買ってきて、そしてどのネクタイを締めたらいいか迷った。

シャイヴィラーさん本人がドアを開け、ガンザーとウルジに堅苦しい挨拶

をし、そして居間へ案内する。その居間ではすでに、彼らの知らない2組の夫婦がキリム¹の上に立っていて、そして当惑した様子でブラン・カシスに口をつけている。

晚餐は堅苦しく進んでいく。シャイヴィラーさんはいつもと同じように近寄りたく、そして彼の妻は、そんな夫の様子で場の空気が凍ってしまうのを何度も何度も緩和させようと試みる。

それからそこでとんでもないことが起こる。

ガンザーがトイレに行こうとすると、シャイヴィラー夫人は彼に言う。「右側で1番奥の扉です！」

それとも彼女は「1番奥から2番目」と言ったのだろうか？

ガンザーは1番奥の扉に入って見て、そしてそこが寝室だとわかる。しかし彼はすぐに引き返すのではなく、惹きつけられるようにベッドの前で立ち止まる。ここは、とガンザーは考える。つまり偉大であり、何を考えているのか底が知れなくて、畏れ多い存在であるシャイヴィラーさんはここで眠るのだろう。ここで彼は重大な決断による非常に疲れた状態から元気を取り戻し、ここで彼にトップマネジメントという過酷な環境を切り抜けるための力が湧いてくる。

さらにガンザーは畏れ多くもシャイヴィラーさんの枕の上をじっと見る。一彼はその枕がシャイヴィラーさんのものだということを、ベッドサイドのテーブルの上にある3冊のマネジメントブックと社内新聞の最新号によってわかった— ガンザーは、枕の上で半分が羽毛布団の下に潜り込んでいるピンク色の何か横たわっていて、そして行儀良く主人を待っていることに気づく。それはすでに少しくたびれた、ピンク色のプタちゃんのぬいぐるみだ。

Martin Suter, "Ganser weiß zuviel (I)", S. 55-56, in: ders., Unter Freunden und andere Geschichten aus der Business Class, Zürich: Diogenes, 2008, (detebe 23724)

注

- ¹ キリム 中近東のイラン・トルコ・アフガニスタンを主な生産地とする、毛足のない平織りの絨毯・カーベットの一種。手織りのため全く同じものは存在せず、高価なもの。